

日本文学を世界文学として読む

二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書

世界文学と「地方」	堀 まどか (1)
——野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』	
片山廣子の新体詩「あかき貝」について	
——クリステイーナ・ロセッティ『シング・ソング童謡集』との関わり	永井 泉 (18)
『太平記』引用説話の典拠と文脈	
——英訳『太平記』の注記を端緒として	大坪 亮介 (32)
和歌と漢詩	
——平安朝における実例をめぐって	山本 真由子 (44)
芥川龍之介から堀辰雄へ	
——『玉書』の受容から見る東西意識	劉 娟 左 (31)
芥川龍之介「秋山図」など	
——世界文学としての芥川作品	奥野 久美子 左 (18)
『オデュッセイア』の類話における英雄像比較	
——オデュッセウス、百合若大臣、ポイヤウンペ	高島 葉子 左 (1)
あとがき	(i)



Urban-Culture Research Center

大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

Reading Japanese Literature as World Literature

World Literature and the Local: Yone Noguchi and *Poetry* - a Chicago Journal of Verse

HORI Madoka 1

An Analysis of the poem "A Red Shell (Akaki-kai)" by Hiroko Karayama:

The Influence of *Sing-Song: A Nursery Rhyme Book* by Christina Rossetti

NAGAI Izumi 18

Issues on the Sources and Contexts of the Stories quoted in *Taiheiki*:

Considering McCullough's Notes as a Clue

ŌTSUBO Ryōsuke 32

Waka and Sinitic Poetry: Examples in the Heian Period

YAMAMOTO Mayuko 44

From Ryūnosuke Akutagawa to Tatsuo Hori:

The Orient and the Occident in their Interpretation of *Le Livre de Jade*

LIU JUAN left 31

"Autumn Mountains (*Shūzan-zu*)" by Ryūnosuke Akutagawa:

Akutagawa's Works as World Literature

OKUNO Kumiko left 18

Odysseus, Yuriwaka-daijin, and Poyyaunpe:

A Comparative Study of the Heroic Tales in Ancient Greece, Japan, and Ainu

TAKASHIMA Yōko left 1

**Urban-Culture Research Center,
Graduate School of Literature and Human Sciences,
Osaka City University**

和歌と漢詩

——平安朝における実例をめぐって——

山本 真由子

(要約) 奈良朝から平安朝の前半にかけて、和歌と漢詩との関係は大きく変遷した。本稿では、和歌に視点を置いて、漢詩文隆盛の時代に漢詩と深く接触することによって、和歌が日本文学固有のものとして自覚され、より可能性に富んだ文学作品として形成されてゆく過程を、実例から明らかにしてゆきたい。

はじめに

日本文学における和歌と漢詩の関わりについては、今日、さまざまな捉え方がある。例えば「和歌と漢詩は常にお互いを意識しつつ表現に工夫を重ねてきたよきライバルであった^(一)」といわれる。また、和歌をはじめとする国文学(日本文学)と、漢詩がその一部である中国文学との関係について、「かつて中国文学は、国文学にとって常に憧憬崇敬の対象であり、新たな思想、斬新な発想と表現の源であり続けてきた^(二)」といわれる^(三)。

本稿では、奈良朝から平安朝の前半、九・十世紀にかけて、当時の人々が、和歌と漢詩・漢文の関係をどのように捉えていたか、あるいは、どのように捉えようとしていたかを、和歌に視点を置いて考えたい。

この時期に、和歌と漢詩の関係は大きく変遷した。『萬葉集』の終焉と、嵯峨朝(八〇九年—八二三年)の漢詩文隆盛を経たのち、宇多朝(八八七年—八九七年)の頃には、和歌が朝廷に復帰し、遂に醍醐朝の延喜五年(九〇五)には、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が成立する。

以下では、一書の中で和歌と漢詩が並記される文学作品や、一つの場合で和歌と漢詩とが同時に作られる宴集、遊覧を見てゆきたい。また、和歌に冠せられる「和歌序」を中心に、和歌について記された当時の文章にも目を配りたい。「序」とは、中国文学の一つのジャンルで、序文や前書きに相当し、序が冠せられる作品の概要や制作状況などが記される文章をいう。ただし、「序」は、一般にいう序文とは異なり、それだけで鑑賞し得る作品であるという特徴がある。十一世紀半ばに編纂された漢詩

文集『本朝文粹』の「和歌序」には、歌集の序と、歌会で詠まれた和歌の序とが含まれる。歌会の和歌序は、奈良朝で、「詩序」に倣って作られるようになったものである。Wiebke DENECKE氏は、「日本は、文字が入ってきた古代から二十世紀半ば頃まで「バイリテラート (bilateral)」、つまり漢文と和文、二種類の書記言語を併用した文化を持っていた」と述べ、その二つの言語を融合させた文体の一つが和歌序であるとす。また、氏は、和歌序は、世界文学史的にみても興味深い特異性を有すると指摘している^(三)。和歌について記された文章には、作者が、和歌と漢詩文との関わりをどのように捉えていたかが、具体的に表れていることも少なくない。これらの文章から、作者の考えを検討してみたい。

一、漢詩と和歌との関係の始まり

一―(1)『萬葉集』に見られる漢詩文

和歌と漢詩の関わりの歴史は、日本語は固有の文字を持たなかったため、和歌を表記するために漢字を用いたことに始まると考えられる。現存最古の和歌集、『萬葉集』では、和歌は、漢字の読み(音または訓)を借りて日本語を表記する用法の漢字、所謂「萬葉仮名」で表記される。ただ、『萬葉集』において、「萬葉仮名」で表記されるのは和歌のみで、和歌の詠まれた事情などを記

す詞書(題詞)などの散文は、すべて漢文で記される。『萬葉集』の中で、詠作年が明らかでない最後の歌は、天平宝字三年(七五九)に詠まれた卷二〇卷末歌である。現存最古の漢詩集『懷風藻』の序は、天平勝宝三年(七五一)の日付を有する。両書の作品の制作年代は重なっており、両方に作品を残す作者もいる。

『萬葉集』には、僅かながら漢文作品、漢詩も収められている^(四)。これらの漢文作品や漢詩は、『萬葉集』の編纂に関わったとされる大伴家持、その父旅人、旅人と親交のあった山上憶良などによって作られている。

『萬葉集』の漢詩は全て、漢文に続けて記される。例えば、卷五の大伴旅人「凶文に報へし歌一首」^(五)(793)の後には、「蓋し聞く」で始まる妻の死を嘆く漢文の文章に続けて、その文章に関連する内容を詠う七言古詩一首が収められる。また、漢文の詩序の後に七言古詩一首を配する作品が二例(卷五897の前、卷十七3973の前)ある。

『萬葉集』に収められた、漢文の和歌序は、広く知られている。天平二年(七三〇)正月十三日、大宰帥大伴旅人が、大宰府で梅花の宴を催し、漢文の序と和歌三十首(卷五815-846)とが作られた。序の末尾には、「詩に落梅の篇を紀す。古今夫れ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して、聊に短詠を成すべし」とある。詩には落梅

の篇を作るが、梅を愛でる情は古も今もどんな違いがあるのか、さあ園梅を詠んで、ここに短き歌を作ろうではないか、というのである。「落梅の篇」とは、六朝時代の古楽府「梅花落」を指すとされる^(六)。さらに、この宴には、「梅花落」が愛唱された唐の元宵節の影響が見られ、当時の唐で流行していた風習が遣唐使によって伝えられたものと推定されている^(七)。天平期前後には、遣唐使の派遣が相次いでいた^(八)。唐の流行を摂取しながらも、漢詩に詠まれた梅を愛でる心と、和歌を詠む今の心は同じであるとする点が注目される。

漢文に続けて漢詩と和歌が並記される例に、天平十九年（七四七）三月五日の、大伴家持から大伴池主に宛てた返書（卷十七）がある。この書簡では、漢文に続けて漢詩と和歌が記される。書簡の末尾に「敬みて葉端に写し、式て乱に擬へて曰く」とある。「乱」は、賦の末尾に置かれる大意をまとめる章をいう。ここでは漢詩と和歌を指して「乱に擬へて」という。次に、漢文を省略し漢詩と和歌とを示す。本文は、西本願寺本萬葉集^(九)による。片仮名の訓は、文永三年（一二六六）に仙覚が付した訓を伝えるとされる。

七言一首

抄春余日媚景麗
来燕銜泥賀宇入

初巳和風払自輕
帰鴻引蘆迥赴瀛

聞君肅侶一新流曲
雖欲三追尋ニ良此宴
禊飲催爵泛河清
還知染懊脚踰跣

短歌二首

3976

佐家理等母之良受之安良婆
母太毛安良牟己

3977

安之可伎能保加尔母伎美我
余里多々志孤悲

右の漢詩と和歌とは、異なる景物を詠っている。3976番歌の「夜万夫吉（山吹）」は、池主から贈られた3974番歌に見え、3977番歌の「安之可伎」も、池主の3975番歌の枕詞「葦垣の」を、現実にある葦の垣根として詠う。一方で、漢詩は、池主から贈られた詩序と漢詩とが、三月三日の遊覧を描いていたことをふまえて作られている。注意されることは、右の家持の漢詩と和歌とは、相互に関わりは無いということである。

先に梅花の宴の例もあったように、『萬葉集』の時代に、漢詩と同じ景物や趣向を、和歌に詠ずることがなかったわけではない。天平宝字二年（七五八）正月には、漢詩と和歌（4993）とが作られたようである。題詞の訓み下し文のみ掲げる。

二年の春正月三日、侍従、堅子、王臣等を召して内裏の東屋の垣の下に侍せしめ、即ち玉箒を賜ひて肆宴したまひき。時に内相藤原朝臣の、勅を奉

りて宣く、「諸王卿等、堪ふるに随ひ意に任せ、歌を作り、并せて詩を賦せ」とのりたまひき。仍ち詔の旨に応へて各心緒を陳べて歌を作り、詩を賦しき。「未だ諸人の賦詩と作歌とを得ざるなり」題詞では、他の人々が作った漢詩や和歌はまだ手に入れないという。また、省略した左注に、作者家持は、大蔵に勤務していたため、歌は天皇に奏上できなかったとある。家持は、この宴を知って和歌を準備したが、参加はしなかったと推定されている^(十)。偶然の所産とも思われるが、結果として、『萬葉集』では、同じ景物や趣向を詠んだ漢詩と和歌を並べて収めた例はない。

一―(2) 九世紀の文学における変化

前節で見た、奈良朝の天平期に盛んになった中国文学の受容は、遣唐使の派遣と相俟って、延暦十三年(七九四)の平安京への遷都後も一貫して続いた。この時期、和歌は、公の場で詠まれることが少なくなっていたようである。平安朝初期に詠まれたことが確かな和歌として、『日本後紀』(逸文)には、萬葉仮名で記された桓武朝八首、続く平城朝三首、嵯峨朝二首の和歌が見える。それに比して、漢詩文の隆盛はめざましく、とりわけ、大同四年(八〇九)に即位した嵯峨天皇は、漢詩文を好み、多くの漢詩を残したことで知られる。嵯峨天皇と淳和天

皇の命によって、弘仁五年(八一四)の『凌雲集』を皮切りに、『文華秀麗集』(弘仁九年)、『経国集』(天長四年(八二七))という三つの勅撰漢詩文集が撰進されるに至る。『凌雲集』は、日本で最初の、勅撰すなわち天皇の命令で編纂された、文学作品の集である。その公的な編纂の正当性を示す理念が、小野岑守の『凌雲集』序の冒頭に引用される^(十一)。魏の文帝の「『典論』論文」(『文選』卷五十二)にある「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」である。文帝は、文学は国を治める上に重大な仕事であり、いつまでも朽ち果てることのない偉大な事業であると述べている。『凌雲集』によって、正史や格式に加えて、文学作品の集が天皇の命令によって編纂されるという、勅撰集の歴史が始まる。

淳和天皇のあとを承けて即位した仁明天皇の治世、承和五年(八三八)には、以後の平安朝の文学に大きな影響を与えた、中唐の詩人、白居易(七七二―八四六)の詩文集『白氏文集』が伝来したという記録が残る(『日本文徳天皇実録』仁寿元年(八五一)九月二十六日藤原岳盛卒伝)。白居易の詩文は、平易で分かりやすい言葉を用いて、時節の推移や個人的な心情を敏感にとらえて表現することを一つの特色とする。白居易を中心とした中唐文学の受容は、平安朝和歌の表現が成立する前提となったと考えられる。

また、九世紀には、萬葉仮名を草体化したものに発する平仮名が、日本語の表記に用いられるようになる。極初期の平仮名資料としては、貞観九年（八六七）頃の「有年申文（讚岐国戸籍帳端書）」などが知られる。ほぼ完成された平仮名の姿は、延喜頃（九〇一―九二三）の東大寺東南院文書「因幡国司解案紙背消息」に見られるという^(十三)。『萬葉集』の漢字を用いた表記では、漢字が表語文字である以上、文字の表示する意味が意識されることもあった。そのことは、『萬葉集』の「色二山上復有山者」（巻九 1787）といった、「戲書」といわれる用字法が示す。しかし、平仮名は、漢字から変化した文字であり、字母の語義が意識されることはない。日本語の音節を、特定の意味を表さない文字で表記できるようになったことは、平安朝の文学の発展に寄与することになった。

二、宇多朝―和歌の朝廷への復帰と漢詩

和歌が漢詩に比べて盛んではない状況は、九世紀末の宇多朝に大きく変化する。和歌の公の場への復帰には、漢詩文との交渉が重要な役割を果たした。この期には、漢詩文と和歌とを並記する『新撰萬葉集』や私家集『千里集』などが編纂される。以下、これらの作品集ごとに、詳しく見ていくことにする。

二―(1)『新撰萬葉集』成立の事情

『新撰萬葉集』は、和歌を萬葉仮名で記し、各歌の左には、和歌の内容を翻案した七言絶句の漢詩が付されている。詞書、作者名は記されていない。全体の構成は、寛文七年（一六六七）の版本では、上巻が春歌二一首・夏歌二一首・秋歌三六首・冬歌二一首・恋歌二〇首、下巻が春歌二一首・夏歌二二首・秋歌三八首・冬歌二二首・恋歌三一首・女郎花歌二五首よりなる。全体では二七八首となる。

『新撰万葉集』の撰者は、菅原道真と伝えられている。『日本紀略』寛平五年（八九三）九月二十五日の条には、「菅原朝臣撰進新撰萬葉集二卷」とある。

道真を重用した宇多天皇は、文治を重んじた。宇多天皇は、父光孝天皇の予想外の即位と、自身の臣籍降下を経たのち、親王に復位し、立太子ついで践祚した。宇多天皇は、このような経歴のため、もともと近臣がおらず、藏人所別当の新設などの近臣登用制度を整備したとされる^(十三)。近臣の登用には、才学が重視され、道真が抜擢されることとなった。道真の詩文集『菅家文章』には、宇多天皇の主宰する宴で作られた漢詩、詩序が多く収められている。宇多天皇の関心は、漢詩にとどまらず、和歌にも及んだ。『新撰万葉集』も、その現れの一つと考えられる。

現在、『新撰萬葉集』の諸本の多くに、上巻に「寛平五載秋九月廿五日」の日付の入った序が付される。この序は、歌集に付された和歌序としては現存最古のものである。『新撰萬葉集』の成立の事情は、上巻の序から明らかである。漢文で書かれた序は、作者不明で、読み解きたい部分はあるものの、宇多朝における和歌の状況が詳しく記されている。ここでは、先行研究^{〔十四〕}に基づいて、序の大意を①から⑥に分けて示す。

①『萬葉集』の歌は、「古歌」の流れを汲むものであり、これまで常に、優れた歌であると称せられてきた。まして、鄭衛の音楽のような新しい流行の歌など物の数ではないことは言うまでもない。②聞くところによると、昔は優れた詩歌を作る人士は、時節の情趣に触れて感興が生じて、彼らの詠んだ歌の下書はおびただしい数があるということだ。その書き記されたものを少しづつ尋ね出して読もうと試みたが、入り乱れた有様で、読み解くことは困難であり、なかなか理解が及ばなかった。追求しようとする者、智のある者だけが、古歌の世界に進むことができるのである。③ここに、天皇の命令を承けて、集めてまとめていた歌以外に、さらに口承されていた歌を集め尽くして、数十巻の歌集を編集し、それらの歌を精選し装幀して、箱に収めて高く評価されるのを待った。

ただ、低い見識の者では、出来ることではないことを羞ずるばかりである。

④当代寛平のすぐれた君主（宇多天皇）は、政事の余暇に、宮中を挙げて、歌合を催された。若い詩人、側近の才子が、それぞれ四季の歌を献上して、初めて宮中で宴が行われた。また余興があつて、「恋歌」と「思歌」を左右に番えた。⑤歌風をよく見ると、確かに「古」の歌を見て「今」の歌のを知るといいうが、「今」の歌によつて「古」の歌に比べると、新しい作品は「花」であり、古い作品は「実」である。「花」によつて「実」に比べると、現代の人の言葉で表現された心のあやは、錦を切つたように多く美しい句を書き記し、昔の人の心は、質素な白絹を織つたように少し筋目の整わない言葉をつづっている。そこで、歌合の左の歌を上巻に、右の歌を下巻に配して、すべて二百首余として、新撰萬葉集と名付けた。⑥「先生」はただ倭歌のうるわしさを愛でるばかりではなく、そのうえ絶句も作つて、数首の左に挿し挟んだ。願わくは、家々の歌を愛好する者に梁の塵を動かすばかりに、あちこちの遊興する人に空ゆく雲がとどまるように、この歌集の歌を歌わせたいものである。時に寛平五年九月二十五日、ひそかに現在の和歌の美を尽くしたものの、後世の人には笑われるだろうと思う次第である。

『新撰萬葉集』の序は、大きく前半と後半に分けられる。吉川栄治氏（一九八三年）の説によると、③段までが「古」の歌について述べるのに対して、④段から以下は、「今」の歌についての記述であるという。首肯すべき説と思われる。②段では、古歌の状況を記すが、「草稿^(十五)」すなわち下書とは、①でいう『萬葉集』に入らない歌を指すと考えられる。③段では、古歌を集めた歌集を編纂したことを記す。吉川氏（一九八三年）および新撰万葉集注釈では、この序の作者が、天皇の命令によって、現在散逸した数十巻の無名の歌集を編集したあと、その歌集を精選した歌集をも編纂したとする。

④の宇多朝の「歌合」とは、具体的には、「寛平御時后宮歌合」を指す。『新撰萬葉集』では、続く⑤段で述べるように、同歌合の左の歌を上巻に、右の歌を下巻に収録している。また、「初成^二九重之宴^一」という記述によって、寛平御時后宮歌合は、宮中で行われた最初の歌合であったと推定されている^(十六)。⑤段は、古今の歌を対比して、六朝の詩論に拠る、所謂、花実論が展開される。のちに『古今集』「真名序」には「浮詞雲興、艶流泉涌、其実皆落、其花孤榮^(十七)」と言い、「仮名序」には「人の心、花に成りけるより、不実なる歌、はかなき言のみ出来れば」と言っている。『古今集』では、花実兼備を理想とし、現代の世の中は、表現技巧は巧みだが実

意のない空虚な和歌ばかりが詠まれるようになったと論じる。吉川氏（二〇〇四年）は、⑤では、花実論を軸とした古今の歌の比較によって、今の歌の価値が確認され、その結果、今の歌の撰集が行われるという、「歌集形成の理論化」が試みられるとする。漢詩と和歌との関わりが、理論の面でも見られるようになった点が注意される。

⑥のみ、改めて、訓み下し文と原文とを引用する。

先生啻に倭歌の佳麗を賞するのみにあらず、兼ねて亦一絶の詩を綴りて、数首の左に挿さむ。庶幾くは家家の好事をして常に梁塵の動く有り、処処の遊客をして鎮に行雲の遏むるを作さしめよ。時に寛平五載秋九月廿五日、儉かに前世の美を尽して、後世の頤を解かしむと云ふこと爾り。

先生非啻賞倭歌之佳麗、兼亦綴一絶之詩、挿数首之左。庶幾使家家好事常有梁塵之動处处遊客鎮作行雲之遏。于時寛平五載秋九月廿五日、儉尽前世之美而解後世之頤云爾。

「先生」は、新撰万葉集注釈の言うように、ここでは学芸に長じた人の意と考えられる。「先生」が誰を指すかは、序の作者との関わりから、様々な説が示されている。川口久雄氏（一九五九年）は、「先生」は道真を指し、序は道真の門弟の作としている^(十八)。吉川氏（二〇〇四年）は、「先生」は道真で、「賞倭歌之佳麗」は、

歌合への列席、花実論的批評、撰集への参与といった一連の行為を指し、序文の筆者はそこにつらなつた「後進の詞人」の一人であつたと推定する。新撰万葉集注釈は、序の作者が撰者であると考へ、作者を道真とし、「先生」の一案として大江千里を比定する。ただし、『古今集』真名序は、撰者ではない紀淑望が書いており、序の作者と撰者とは異なる場合もある。「先生」は道真で、序の作者は道真と親しい年下の人物とするのが穏当であるう。

また、「数首の左に挿さむ」によつて当初の『新撰萬葉集』では、漢詩が付された和歌は数首だったことが分かる。下巻の漢詩を欠く所謂、原撰本系統を除き、現存の諸本は、上下巻とも殆どの歌に漢詩が付されているので、多くの詩が寛平五年以降の増補と見られる。

以上、『新撰萬葉集』の序によつて詳らかにされた、宇多朝の和歌をめぐる状況をまとめると、次のようになる。

(イ) 天皇の命令によつて、萬葉集に入らない、書き記された歌、口承されていた歌が集められ数十巻の歌集にまとめられた。その歌集の中から秀歌を抄出した歌集が作られた。

(ロ) 天皇は、宮中で最初の歌合を催した。

(ハ) 歌合で詠まれた新しい歌は、価値があつたので、

『新撰萬葉集』として編纂された。

(ニ) 『新撰萬葉集』では、学芸に長じた人が、数首の和歌の左に絶句を挿し挟んだ。

二—(2) 『新撰万葉集』の和歌と漢詩との関係

『新撰萬葉集』の和歌と漢詩との関係を、上巻春歌廿一首より一例を挙げて検討する。

3 散砥見手 可有物緒 梅之花 別様句之 袖丹駐礼留
(散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる)

4 春風触処物皆楽 春風触るる処 物皆楽しむ

上苑梅花開也落 上苑の梅花 開きまた落つ
淑女偷攀堪作簪 淑女偷かに攀ぢて 簪と作すに

残香匂袖払難却 残香匂に匂ひて 払へども却き難
堪へたり

和歌は、寛平御時后宮歌合(三番左)に素性作としてある。十巻本歌合では、「袖」を「そら」とする、また『古今集』(巻一春歌上47・素性法師)にも、詞書「寛平御時后宮歌合の歌」として見える。歌意は、散っていると、ただ見ていていけばよいのに(折ってしまったばかりに)、梅の花は、困ったことに匂いが袖に残って消えないことだ、という。漢詩は、梅の咲く場所が「上苑」と、

天子の庭園とされ、女性が梅の枝を簪にしようとして折り取ったところ、梅の余香が袖に残ってぬぐっても除くのは難しい、と詠う。詩の第三句に「偷かに攀ぢて」とあることから、和歌は「上句に「折つてみたりしないで」の気持も含まれよう」とある解釈^(十九)に従う。なぜ「うたて」と詠われるのか。新撰万葉集注釈では、漢詩と整合する形で理解し得る解釈が試みられる。すなわち、梅の香りが男性の薫香になぞらえられていて、あらぬ疑いを女性にもたすがために、困ったと詠うとしている。宇多天皇の周辺では女性の艶冶な姿を描く文学が好まれた。寛平五年正月には、天皇の密宴で「早春、観^レ賜^ニ宴宮人^一、同賦^ニ催^レ粧^一、応^レ製^一」(『菅家文草』巻五)が作られ、妓女の姿が描かれる。和歌で詠まれた、女性の袖に残る梅の香りを、男性の薫香になぞらえるということは、同時期の好尚にも合っている。

右の和歌と漢詩との関係は、漢詩は和歌の詠まれた状況を具体的に描写し、和歌は漢詩の描く状況における人物の心情を表現するという関係であると考えられる。和歌に、同じ景物や趣向を詠んだ漢詩を添え、意味内容をより詳しく詠い、和歌と豊かな漢文学の世界とを組み合わせて示すということが、『新撰萬葉集』で新たに試みられた和歌と漢詩との関わりだった可能性がある。

二―(3) 『千里集』成立の事情

続いて、大江千里の家集『千里集』について検討する。『千里集』は『新撰萬葉集』が撰進された七ヶ月のち、寛平六年(八九四)四月二十五日に、宇多天皇に献じられた。家集の冒頭には、序文と呼ばれる文章があり、金子彦二郎氏は、「序記奏状」また「巻頭の奏状」と呼ぶ^(二十)。文章の形式は「表」や「奏状」といった天皇に上申する文書に近い。献上された際は、書物とは別に存在したと思われる。従って、この文章は和歌序ではない。

右によると、千里は、二月に「古今和謌多少献上^(二十一)」と、古今の和歌を多少なりとも献上せよ、という命令を受けた。しかし、「臣儒門余擘、側聴^ニ言詩^一、未^レ習^ニ艶辞^一、不^レ知^レ所^レ為^一」と、自分が儒家の家に生まれたため、作詩については聞くことはあつたが、未だ麗しい和歌の言葉には習熟しておらず、何をしようか分からなかつた、という。そのため、「今臣僅搜^ニ古句^一、構成^ニ新謌^一。別亦加^ニ自詠十首^一、惣^ニ百廿首^一」と、私はわずかに古い詩句を搜して、組み合わせさせて「新謌」を詠んだ、別に自詠の歌十首を加えて全部で百二十首にした、と記している。

『千里集』の現存諸本では、百二十五首の和歌が収められる。そのうち、百十五首が詩句と組み合わせられている。そのため、『千里集』は、近世の『群書類従』への所収時に付された『句題和歌』の別名で呼ばれることも

多い。『千里集』末尾の「詠懐」以下の十首には詩句は付されていない。この部分が、「自詠十首」に当たると考えられる。詩句の出典は、白居易が七十五句、元稹が十句、上官儀と章孝標がそれぞれ二句、『初学記』から二句、朱慶余が一句、未だ不明なもの十八句となっている(二十一)。

宇多天皇の千里への命令は、『新撰萬葉集』の序に、古歌を集め、今の歌の撰集が行われたと記すことに近似する。しかし、千里は、『新撰萬葉集』とは異なり、勅意を違えて、「古今の和詞」ではなく「新詞」を奉っている。吉川栄治氏は、千里が儒者として自らの力量を示すべく、「僅かに古句を搜して構へて新詞を成す」という方法を採用たと指摘する。氏は、また、「構成」が新撰萬葉集序の「兼ねて亦一絶の詩を綴りて、数首の左に挿さむ」の「挿」と変わりはなく、『千里集』において「摘句とそれに番われた歌とが同等の比重を持つ事も新撰萬葉集における詩と歌との関係と同様だろう」と指摘する(二十三)。「構成」は「僅搜」と対になっており、「構」は、組み合わせるといふ意と考えられ、氏の見解は首肯すべきと思われる。

二―(4)『千里集』の和歌と漢詩との関係

『千里集』についても、漢詩と和歌との関係を、具体

例を挙げて検討する(二十四)。

可憐虚度好春朝

(憐れむべし虚しく度る好き春朝を)

19 あはれとは我が身のみこそ思ひければかなく春を過ぐし来ぬれば

右は、春部に収められる。漢詩句は、ああ惜しまれることよ、むざむざとやり過ぐす春の朝の風流であることは、という。詩句の出典は、元稹の七言絶句「酬楽天三月三日見寄」(『元氏長慶集』卷二十一)の結句である。この詩は、元稹が、元和十三年(八一八)、左遷中に、白居易から寄せられた詩(『白氏文集』1081)に次韻唱和した作品である。元稹は、病を養いながら一人むなしく過ぐすこの年の三月三日の感懐を詠う。「虚度」は、むざむざとやり過ぐすことをいう。『千里集』諸本には句題を「虚處」に作るが、字体の類似による誤写とみられ、『元氏長慶集』により「虚度」に改める。

右の漢詩句に対して、和歌は、ああ悲しいと、ただ私自身の身の上ばかりを思うことだ、むなしく春を過ぐして来たので、と詠う。「我が身」は、自分自身の身の上。「のみこそ」は、それと限定して強調する。この表現については、詩句に相当する語がない。金子氏は、「修飾語の添加又は改竄を試みたもの」の例としてこの表現を引く(二十五)。ただし、自己を客観視し孤独を意識して詠

むのは、出典詩の第三句「独り破れし簾すだれに倚より 閑しづかに悵望す（独倚破簾閑悵望）」をも背景にしているからであろう。この歌のように、千里が自己を「我が身」と省みて詠嘆する和歌としては、「月見ればちぢにもものこそかなしけれ我が身ひとつの秋にはあらねど」（古今集・卷四秋上193・是貞親王の家の歌合によめる・大江千里）が知られる。「はかなく」は、内容が充実していな
いさまに對する不安感を表す。詩句「虚」に当たる。漢詩では、三月三日、一日のみのほかなさを詠むのに対し、和歌では春全体について詠う。元稹の詩は、左遷中で三月三日の宴に出られないことを残念に思い「虚」と詠うのに対して、千里の歌は、春の除目で良い結果が得られなかったことを訴えているのではないだろうか。また、和歌に見られる上句で心情を詠み下句でその理由を示す倒置法は、詩句に倣っている。なお、この歌の下句は、「詠懷」の最後の一首「ほととぎす五月さつきまたずて鳴きにけりはかなく春を過すぐし来ぬれば」（122）と下句が同じである。このことから、漢詩句の選定にも、千里個人
の思惟がはたらいており、自己の思いを、この歌の場合には不遇感を託すことのできる詩句を選び、和歌に翻案したのではないかと考えられる。

右の例に見られるように、『千里集』における漢詩と和歌との組み合わせには、金子彦二郎氏（二十六）以来変わ

らず指摘されてきたとおり、まず詩句の意味内容を、ほぼ変えることなく、和歌に詠むという特色があると思われる。これは、一見、『新撰萬葉集』における漢詩が和歌の意味内容をより詳しく詠うという関係とは異なる。しかし、『新撰萬葉集』の絶句と、『千里集』の詩句一句とでは詠むことのできる表現量に差がある。それゆえに、生じた違いに過ぎないと考えられる。千里は、数ヶ月前に献上された『新撰萬葉集』の、和歌を漢詩に詠み換えるという方法を知って、『千里集』の方法を思い付いたのではないだろうか。すなわち、自らの思いを託すことのできる詩句を選び、和歌に翻案して詠い、それらの詩句と和歌とを組み合わせるといふ方法である。小山順子氏は、千里の意図は「和漢の結び付きを可視化すること」により「漢詩と和歌の対応関係や翻訳の技巧を明示することにあつた」とする（二十七）。氏の言うとおり、儒者であり歌人でもあるという力量を示すということが、千里の一つの意図であつただろう。そうした意図の背景には、千里の自らの不遇を天皇に伝えたいという強い思いがあり、『千里集』にはその思いが、詩句の選択や、和歌に詠み換えてゆく際の詩句の解釈によって表現されていると思われる。先に宇多天皇が、近臣の登用に才学を重視したと述べた。そのような時代であつたからこそ、生まれたのが『千里集』であつたと思われる。

二―(5)『宮滝御幸記』

宇多天皇は、寛平九年(八九七)の讓位後も、『新撰萬葉集』と『千里集』のように、漢詩文と和歌とを組み合わせる趣向に興味を抱いていたとおぼしい。そのことを示すのが、昌泰元年(八九八)十月二十日からの「鷹狩逍遙」の旅の記録である、菅原道真の『宮滝御幸記』である。

宮滝御幸は、平安京近郊での鷹狩に続く、鷹狩を伴ったの遊覧の旅であった。旅の記録は、十月二十日、二十一日の途中までは、紀長谷雄『昌泰元年歳次戊午十月廿日競狩記』(『紀家集』卷十四断簡)が記している。それに続く記録は、右脚を馬に踏まれて帰京を余儀なくされた長谷雄に代わって、道真によってなされた。残念なことに、『宮滝御幸記』は、今日伝存せず、『扶桑略記』昌泰元年十月二十一日条以降に、計十一日分の節略文(以下「宮滝御幸紀略」と呼ぶ)が載せられ、藤原清輔『袋草紙』と藤原為家『後撰集正義』に、後人が和文に直したと思われる一部が引かれるにすぎない。また、この御幸の間に一行が詠んだ和歌の一部が諸歌集に伝存する。なお、「宮滝御幸紀略」には、和歌が含まれていない。「宮滝御幸紀略」の十月二十三日条には、上皇が奈良に着いてから、歌人として知られた素性を招いたことが記される。それ以降、上皇が侍臣に和歌を詠ませるとい

う記事が目立つ。次の二十五日条にも、「宮滝を観る」の題で、和歌が詠まれたことが記される。

廿五日。遂に宮滝に至る。愛賞し徘徊して景の傾くを知らず。(略)勅有りて曰く、「勝地空しく過ぐべからず。「宮滝を観る」を以て題と為し、各和歌を献ぜよ」と云々。(略)是の日、山水興多く、人馬漸く疲る。素性法師、菅原朝臣、昇朝臣等、三騎尾に御して行く。素性法師問ひて曰く、「此の夕べ宿を何処いづこに致すべき」。菅原朝臣、声に応じて誦して曰く、

不定前途何処宿 前途を定めず 何処にか宿らむ
白雲紅樹旅人家 白雲紅樹は 旅人の家なり
山中幽邃、人の句を連ぬる無し。菅原朝臣、高声にて呼びて曰く、「長谷雄何処にか在る、長谷雄何処にか在る」と。再三止めざりしは、蓋し其の友を求めたりしなり(三十八)。

右の記事に見える、「宮滝を観る」で詠まれたと考えられる四首の和歌が『後撰和歌集』(1236・1237・1356・1367)に収められている。宇多上皇に加えて、同日条の後半に登場する三人、素性、道真、源昇の和歌が選ばれている点が興味深い。

記事の後半では、素性の問いに答えて、道真が一聯の詩句を口吟している。大胆な推測をするならば、素性の

問い「此夕可致宿於何処」は右のように訓読した場合、連歌の上の句であり、道真の詩句はそれに答えた詩句であるように思われる。次の「人の句を連ぬる無し」や、詩友長谷雄を呼び続けた自らの姿の描写は、和歌よりも漢詩の詩興を共有する友人を求めたという言明のように感じられる。

蔵中スミ氏は、『宮滝御幸記』においては、和歌は「万葉仮名」を基本とした表現様式をとっていた」と推測している（二十九）。また、氏は、鷹狩を名目とした御幸であるが、当初から一行の胸には「文雅の遊び」すなわち「和歌と漢詩との両面からする旅中吟」への期待が宿つていたとする。現在の「宮滝御幸紀略」から推測すると、先に引用した二十五日条も含めて、当初、和歌と漢詩とが共に記録されていたと考えられる。

以上要するに、宇多朝における漢詩と和歌との関係の特徴は、同じ景物や趣向を、和歌と漢詩との両面から詠み、それらを一つの作品に並記することにより対比させて享受する点に存する。宇多天皇はじめ、道真、千里など当時の人々が、和歌と漢詩を等価なものとして捉えようとしていたからこそ、このような作品が複数編まれることになったと考えられる。

三、『古今和歌集』の成立

最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の二つの序には、醍醐天皇の治世の九年、延喜五年（九〇五）の日付が見える。漢文の「真名序」には、成立時の事情が次のように記されている。

陛下の御宇、今に九載なり。（略）爰に大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑等に詔して、各家集並びに古来の旧歌を献らしむ。続万葉集と曰ふ。於是に重ねて詔有り。奉る所の歌を部類し、勅して二十卷と為す。名づけて古今和歌集と曰ふ。

また、紀貫之が筆者と推定される「仮名序」にも、同一の内容が記されている。

かかるに、今、皇の、天の下知ろしめすこと四つよの時、九回りになむ成りぬる。（略）延喜五年四月十八日に大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて、万葉集に入らぬ古き歌、自らのをも、奉らしめ給ひてなむ、それが中に、梅をかざすよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、又鶴亀に付けて、君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て妻を恋ひ、逢坂山に至りて手向けを祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬ種々の歌をなむ撰ばせ給ひける。すべて千歌二十卷、名づけて古今

和歌集といふ。

現在一般には、先ず「真名序」が書かれ、それをふまえて「仮名序」が書かれたとされている^(三十一)。ただし、「真名序」の作者、紀淑望は儒官であり、和歌に対する知識が乏しく、序の末尾に「臣貫之等謹序」とある、紀貫之によつて草案が書かれたと推定される^(三十一)。「仮名序」は、成立時は未詳であるものの、和文で書かれた極初期の和歌序である。

『古今集』において、撰者たちは、「文字革命を断行」した^(三十二)。すなわち、真名序を除く、同書の全ての部分において、平仮名を主体とした表記を採用したのである。十二年前の『新撰萬葉集』の和歌が、萬葉仮名で表記されていたことに比べると、表記に関する意識は全く異なつているといえる。

平仮名で表記されたとはいへ、『古今集』において和歌と漢詩との関係が途絶えたわけではない。『萬葉集』とは異なる、『古今集』の和歌の多彩な表現が、漢詩文の表現を学ぶことによつて成立したことは、多くの研究によつて明らかにされている^(三十三)。『古今集』の和歌は、一首ごとに、漢詩文からの発想、表現の摂取が指摘される^(三十四)。

そうは言つてもやはり、醍醐朝において、漢詩と和歌の関係の捉え方は変化したと言えるのではないか。『古

今集』は、和歌と漢詩とを並記はせず、例えば『千里集』の詩句を翻案した和歌は「題しらず」「よみ人知らず」として和歌のみ収められる(巻四秋上185)。平仮名表記が勅撰集という公式の書に採用されたことは、当時の人々に、和歌が漢詩とは区別されるべき日本語の文学作品であるという自覚をもたらしたと考えられる。

四、おわりに

延喜七年(九〇七)の宇多法皇の「大堰川行幸」に際しては、同じ漢字三字の句題のもとに漢詩と和歌とが詠作され、和歌には紀貫之が書いた和文の和歌序が冠されている^(三十五)。

〔第一段〕あはれわが君の御代、なが月のこゝぬかと
昨日いひて、のこれる菊見たまはん、またくれぬべ
きあきを惜^おしみたまはんとて、月のかつらのこなた、
春の梅津より御舟よそひて、わたしもりをめして、
夕月夜小倉の山のほとり、ゆく水の大井の河邊に御
ゆきし給へば、久かたの空には、たなびける雲もな
く、みゆきをさぶらひ、ながるゝ水ぞ、そこににご
れる塵なくて、おほむ心にぞかなへる。

〔第二段〕いま御^みことのりしておほせたまふことは、
秋の水にうかびては、ながるゝ木葉とあやまたれ、
秋の山をみれば、織^をるひとなき錦とおもほえ、もみ

ぢの葉のあらしにちりて、くもらぬ雨ときこえ、菊の花の岸にのこれるを、空なる星とおどろき、霜の鶴河邊にたちて雲の居るかとうたがはれ、夕の猿山のかひになきて、人のなみだをおとし、たびの雁雲ぢにまどひて玉札と見え、あそぶかもめ水にすみて人になれたり。入江の松いく世へぬらん、といふ事をぞよませたまふ。

〔第三段〕我らみじかき心の、このもかのもにまどひ、つたなきことの葉、吹風の空にみだれつゝ、草のはの露とともにうれしき涙おち、岩波とともによろこぼしき心ぞたちかへる。このことの葉、世のすゑまでのこり、今をむかしにくらべて、後の今日をきかんな人、あまの栲繩くり返し、しのぶの草のしのばざらめや。

第二段では「いま御ことのりしておほせたまふ」とは、……といふ事をぞよませたまふ」と、「秋の水に泛かぶ（泛ニ秋水）」など九つの句題が、この折りに詠まれた和歌を利用して、日本語の文章で表現されている。序の末尾には、これらの和歌が後世まで残ることによって、自らの時代を昔に比べて、今日の行幸のことは知るであらう後世の人は、繰り返し恋慕うであらう、という。当代の文学への自負が感じられる結びである。

小稿の検討をふりかえると、奈良朝の『萬葉集』では、

表記には全て漢字が用いられ、詞書などの散文は漢文で記すという方法を採用していた。嵯峨朝の漢詩文隆盛の時代には、文学作品が公式の書、勅撰漢詩集として編纂され、文学が国家社会を支える学問として位置づけられた。宇多朝では、文学に関心を寄せた天皇のもと、和歌の再評価が進み、漢詩と等価なものと捉えた作品が生まれた。続く醍醐朝では、平仮名を勅撰和歌集の表記に採用し、和歌を、漢詩と区別して、漢詩と対峙しうる日本語の文学作品として形成しようとした。右の和歌序が書かれた宴集では、同時に漢詩が作られた。そのことを知ると、序の結びは、中国文学から表現や発想を摂取しつつも、漢詩とは別個の、日本文学である和歌の価値を形成したことを自負し、それが後代へも継承されることを願った言葉であるように思われる。

〔注〕

(一) 堀川貴司氏「和漢」（鈴木健一・鈴木宏子両氏編『和歌史を学ぶ人のために』世界思想社、二〇一一年、「第三部 キーワードによる通覧」所収）。

(二) 大谷雅夫氏『歌と詩のあいだ―和漢比較文学論攷』（岩波書店、二〇〇八年）「序説―「月」をめぐる和漢比較文学論攷」。

(三) Wiebke DENCKE氏「漢（文）」で「和」を描き出す―和歌序の文体」（同氏・河野貴美子氏ほか編『日本「文」学史 第一冊 「文」

の環境―「文学」以前」勉誠出版、二〇一五年所収)。

(四) 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学 中―出典論を中心とする比較文学的考察―』(塙書房、一九六四年)、第五篇第十章「天平期に於ける萬葉集の詩文」など参照。

(五) 『萬葉集』の本文は、西本願寺本萬葉集を底本とする、佐竹昭広氏ほか校注『萬葉集 一―四』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九一―二〇〇三年)により、歌番号は『国歌大観』による。

(六) 辰巳正明氏「落梅の篇―楽府「梅花落」と大宰府梅花の宴―」(同氏『万葉集と中国文学』笠間書院、一九八七年所収、初出は一九八四年)参照。

(七) 李宇玲氏「風流と踏歌―天平宮廷文化の創出背景をめぐって―」(同氏『古代宮廷文学論―中日文化交流史の視点から―』勉誠出版、二〇一一年所収、初出は二〇〇一年)。

(八) 森公章氏『遣唐使の光芒東アジアの歴史の使者』(角川選書、角川学芸出版、二〇一〇年)「表1―1遣唐使の一覧」によると大宝二年(七〇二)、養老元年(七一七)、天平五年(七三三)に派遣される。

(九) 主婦の友社・おうふう編『西本願寺本萬葉集(普及版)巻第十七』(主婦の友社、一九九六年)。

(十) 注(五)『萬葉集』(新日本古典文学大系)参照。

(十一) 滝川幸司氏「勅撰集の編纂をめぐって―嵯峨朝に於ける「文章経国」の受容再論―」(同氏ほか編『日本古代の「漢」と「和」 嵯峨朝の文学から考える』アジア遊学、勉誠出版、二〇一五年)参照。

(十二) 日本語学会編『日本語学大辞典』(東京堂出版、二〇一八年)、「平

仮名」(矢田勉氏)の項参照。

(十三) 川尻秋生氏「文の場―「場」の変化と漢詩文・和歌・「記」」(注三『日本「文」学史 第一冊 「文」の環境―「文学」以前』所収)。

(十四) 高野平氏『新撰万葉集に関する基礎的研究』(風間書房、一九七〇年)。吉川栄治氏「古歌と『万葉』―『新撰万葉集』序文の検討―」(『和歌文学研究』四十六号、一九八三年二月)。泉紀子氏『新撰萬葉集』成立についての試論」(『女子大文学・国文篇』三四号、一九八三年三月)。吉川栄治氏「新撰万葉集と古今集」(増田繁夫氏ほか編『古今和歌集研究集成第一巻 古今和歌集の生成と本質』(風間書房、二〇〇四年)。新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈 卷上(一)』(和泉書院、二〇〇五年)。

(十五) 『新撰萬葉集』の本文は、寛文七年の版本により、作品番号は『新編国歌大観』による。

(十六) 奥村恒哉氏「古今集の成立―寛平と延喜」(同氏『古今集・後撰集の諸問題』風間書房、一九七一年所収、初出は一九五四年)。

(十七) 以下、『古今和歌集』などの勅撰和歌集の本文、歌番号は『新編国歌大観』による。

(十八) 川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究 上巻』(明治書院、一九五九年)。なお、同書三訂版(明治書院、一九八二年)においても、当該の記述に変更は見られない。

(十九) 小島憲之・新井栄蔵両氏校注『古今和歌集』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年)。

(二十) 金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研

究篇』(増補版、培風館、一九五五年、初版は一九四三年)。

(二十一) 『大江千里集』の本文は、冷泉家時雨亭文庫編『擬定家本私家集』(冷泉家時雨亭叢書、朝日新聞社、二〇〇五年)所収「大江千里集」による。＊は、諸本により校訂した箇所である。歌番号は、同系統の宮内庁書陵部蔵『大江千里集』(五一・一二三)を底本とする『新編国歌大観』による。

(二十二) 注(二十) 金子氏前掲書。陳茵氏「『大江千里集』の句題原拠不明歌について」(『愛知淑徳大学国語国文』一八、一九九五年)。

蔵中さやか氏『題詠に関する本文の研究 大江千里集・和歌一字抄』(おうふう、二〇〇〇年)。

(二十三) 吉川栄治氏「大江千里集小考―句題和歌の成立をめぐる―」(『国文学研究』(早稲田大学)六六集、一九七八年)。

(二十四) ここでとりあげる和歌については、句題和歌研究会(代表、新間一美氏)において、種々の御示教をいただいた。

(二十五) 注(二十) 金子氏前掲書(三三六頁)。

(二十六) 注(二十) 金子氏前掲書、第二、第七章、第二節「句題和歌に於ける千里の作歌技巧」など参照。

(二十七) 小山順子氏「漢詩文の受容と和歌独自の創造的機能―『大江千里集』所載句題和歌の享受から―」(錦仁氏編『中世詩歌の本質と連関』竹林舎、二〇一二年所収)。

(二十八) 「宮滝御幸紀略」の本文は、『扶桑略記』(新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九三二年)による。

(二十九) 蔵中スミ氏『宮滝御幸記』考(同氏『歌人素性の研究』桜楓

社、一九八〇年、初出は一九七九年)。

(三十) 渡辺秀夫氏「仮名散文の創出―古今集仮名序をめぐる―」(同氏『和歌の詩学―平安朝文学と漢文世界―』勉誠出版、二〇一四年所収、初出は二〇一一年)など参照。

(三十一) 村瀬敏夫氏『紀貫之伝の研究』(桜楓社、一九八一年)参照。

(三十二) 大野晋氏「仮名の発達と文学史との交渉」(同氏『語学と文学の間』岩波現代文庫、岩波書店、二〇〇六年、初出は一九五二年)。

(三十三) 早期の研究としては、小西甚一氏「古今集表現の成立」(『日本学士院紀要』七卷三号、一九四九年十一月)がある。小沢正夫氏『古今集の世界 増補版』(塙書房、一九七六年、初版一九六一年)、

小島憲之氏『古今集以前』(塙書房、一九七六年)、渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』(勉誠社、一九九一年)、鈴木宏子氏『古今和歌集表現論』(笠間書院、二〇〇〇年)など参照。

(三十四) 注(十九) 『古今和歌集』(新日本古典文学大系)、渡辺秀夫氏「古今集歌にみる漢詩文的表現―対照・一覽稿」(同氏『平安朝文学と漢文世界』)など参照。

(三十五) 『古今著聞集』(永積安明・島田勇雄両氏校注『古今著聞集』(巻十四・遊覧第二十二・479) 日本古典文学大系、岩波書店、一九六六年)による。ただし、一部表記を改めたところがある。内閣文庫蔵『扶桑拾葉集』(二〇四・一四三)本(紅葉山文庫旧蔵、刊本)により、校訂した箇所は次のとおり。織をるひと―底本「をりひま」。くもらぬ雨―底本「もらぬ雨」。このもかのもと―底本「このもかのもと」。露とともにうれしき涙―底本「露ともに涙」。

「研究科プロジェクト」成果報告書
『日本文学を世界文学として読む』

平成三十一年（二〇一九）三月三十一日発行

編集 山本 真由子

発行 大阪市立大学大学院文学研究科
都市文化研究センター

〒五五八―八五八五

大阪市住吉区杉本三―三―一三八

電話〇六―六六〇五―三一―一四

印刷 博進印刷株式会社

〒五五九―〇〇〇二

大阪市住之江区浜口東二―七―二四
